

# 事例 No.33 高知県高岡郡四万十町

## 1. 地域の概況（基礎データ）

範囲・位置	範囲	<ul style="list-style-type: none"> <li>高知県高岡郡四万十町（総面積 642km<sup>2</sup>）</li> </ul>
	位置	<p><b>四万十川中流部の中山間地に位置する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高知市から直線距離で約 50～70km、自動車です約 1 時間半～2 時間半</li> </ul>
		 <p>図 四万十町の位置 (出典：四万十町 HP)</p>
自然条件	地形・水系	<p><b>山々の間を縫って四万十川が蛇行しつつ緩やかに流れる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>四万十町は四万十川の中流域に当たり、山々の間をぬって河川が蛇行しながら流れる。</li> <li>四万十川本流は標高約 200～250m、山地（ピーク）は約 500～600m であり、急斜面が大部分を占め、平地は河川沿岸に限られる。</li> </ul>
	植生	<p><b>地域の大部分が二次林・人工林で占められている。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>森林の大部分は、生活・生業と関わり合いながら形成された二次林・人工林である。</li> <li>河川沿岸にシイ・カシ萌芽林、その周囲にアカマツ林やスギ・ヒノキ人工林が広がる</li> </ul>
		 <p>四万十川流域の典型的な景観（地図・写真何れも旧十和村付近）</p>
		 <p>四万十川中流域沿岸の植生図（出典：第 3 回自然環境保全基礎調査）</p>

社会条件	土地利用	<p><b>緑深い山々に囲まれ、谷間の河川沿いで暮らしが営まれている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・四万十川流域は我が国国有数の林業地域であり、流域総面積のうち約 8 割が森林であり、そのうちヒノキ・スギを中心とする人工林が約 7 割を占める。</li> <li>・四万十川流域の数少ない谷底や中州が集落・農地として利用されている。</li> <li>・四万十町単独では、町の総面積 642km<sup>2</sup>のうち、林野が 87.1%を占め、農地は 4.8%である。</li> </ul>																											
	人口	<p><b>急速に人口減少・高齢化が進んでいる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 7～17 年の間に町の総人口が約 11%減少している（23,081 人 20,527 人）</li> <li>・平成 17 年の町の高齢化率は約 35.0%であり、高知県（25.9%）及び全国（20.1%）の値を大きく上回っている。</li> </ul>																											
	産業（特に農林漁業）	<p><b>地域を支えてきた農林業が衰退傾向にある</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長年に渡り、農林業が地域の暮らしを支えてきたが、近年は担い手や生産量等に係る各種数値が低下している。</li> <li>・平成 17 年においては基幹的農業従事者の平均年齢が 60 才を超えている（旧窪川町：61.4 歳、旧大正町：63.3 歳、旧十和村：65.5 歳）</li> </ul> <p style="text-align: center;">表 四万十町の農林家の動向（出典：農林業センサス）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2">種別</th> <th>平成 7 年</th> <th>平成 17 年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">林家</td> <td>林家数</td> <td>2,522 戸</td> <td>2,265 戸</td> </tr> <tr> <td>所有山林面積</td> <td>21,453 ha</td> <td>15,271 ha</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">農家</td> <td>農家数</td> <td>2,856 戸</td> <td>2,443 戸</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">経営耕地面積 (総面積)</td> <td>2,450 ha</td> <td>2,355 ha</td> </tr> <tr> <td>田</td> <td>2,067 ha</td> <td>2,064 ha</td> </tr> <tr> <td>畑</td> <td>210 ha</td> <td>364 ha</td> </tr> <tr> <td>樹園地</td> <td>172 ha</td> <td>127 ha</td> </tr> </tbody> </table> <p><b>四万十川水系では内水面漁業が盛んであり、今日まで存続している。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・四万十川及びその支流は、大きなダムが少なく水質が良好であるため、ウナギ、アユ、アオノリ、テナガエビなどの多種多様な川魚が生息し、古くから山間部の貴重なタンパク源として漁業の対象とされおり、「川漁師」が現存する。</li> <li>・平成 15 年現在で、町内の漁業経営体数は 87、従事者数は 48、就業者数は 145 名、漁船数は 115 隻である。</li> </ul>	種別		平成 7 年	平成 17 年	林家	林家数	2,522 戸	2,265 戸	所有山林面積	21,453 ha	15,271 ha	農家	農家数	2,856 戸	2,443 戸	経営耕地面積 (総面積)	2,450 ha	2,355 ha	田	2,067 ha	2,064 ha	畑	210 ha	364 ha	樹園地	172 ha	127 ha
	種別		平成 7 年	平成 17 年																									
林家	林家数	2,522 戸	2,265 戸																										
	所有山林面積	21,453 ha	15,271 ha																										
農家	農家数	2,856 戸	2,443 戸																										
	経営耕地面積 (総面積)	2,450 ha	2,355 ha																										
		田	2,067 ha	2,064 ha																									
		畑	210 ha	364 ha																									
樹園地		172 ha	127 ha																										
歴史・文化	<p><b>古くから林業を中心とする農山村の営みが継承されてきた</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代・中世に「陸の孤島」「遠流の国」と呼ばれていた土佐国の中でも最奥部に位置し、古くは自給自足の山村生活が営まれていた。</li> <li>・土佐のヒノキ・スギは古くから名産品として名高く、四万十川中流部でも中世より林業が営まれ、川を使った木材流送が行われてきた。</li> <li>・昭和 30～40 年代の拡大造林政策により、薪炭用のシイ・カシ林からスギ・ヒノキ林への転換が進み、人工林が大半を占める景観が形成された。</li> </ul> <p><b>四万十川と地域の暮らしが関わり合った山里の景観が形成されている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域を貫いて流れる四万十川及びその支流は、今なお飲料水や生活用水の供給源や内水面漁業の場として利用され、また、かつては木材や生活物資の運搬路として利用されるなど、人々の暮らしと深く関わってきた。</li> <li>・その中で、古くから谷底の狭い平地や中州に形成されてきた農地、戦後に建設された「沈下橋」(増水時には水面下に潜ってしまう橋)など、地域固有の景観が形成されてきた。</li> <li>・上記の河川と地域の暮らしが関わり合って形成された景観が評価され、平成 20 年 11 月には、国の文化審議会が「四万十川流域の文化的景観 - 中流域の農山村と流通・往来」を国の重要文化的景観に選定するよう文部科学大臣に答申した。</li> </ul>																												



図 四万十川の沈下橋

## 2. 地域における里地里山の保全・活用の取組

～一次産業から持続的な地域づくりを目指す「四万十ドラマ」を中心とした取組～

### 1) 取組の実施主体・体制

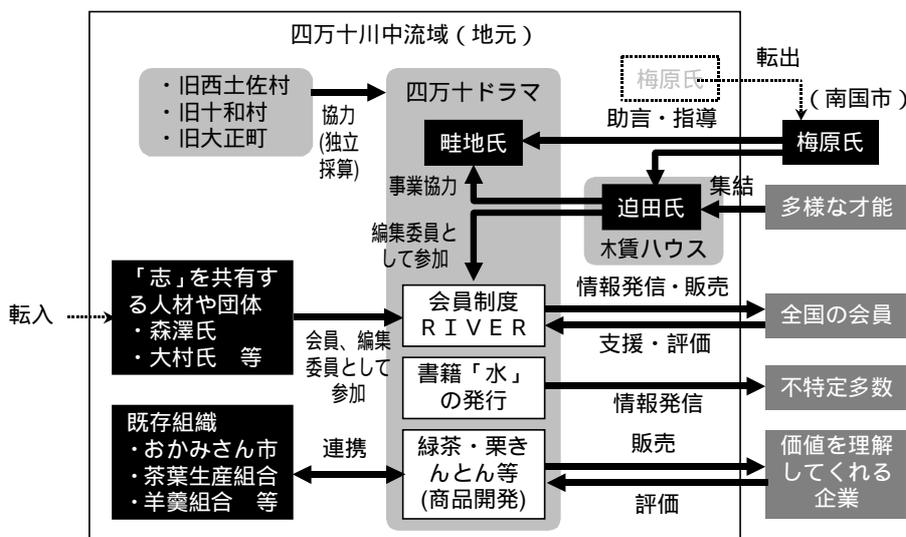
四万十川中流部では、住民・事業者・行政それぞれの立場から、地域活性化や四万十川の環境保全の取組が行われている。

こうした中で、平成6年に設立された「株式会社 四万十ドラマ」(設立当時は第三セクター企業、現在は民間企業)は、地域の天然素材にこだわった商品開発・販売等に取り組み、着実に成果を挙げている。

#### 株式会社 四万十ドラマ」の会社概要(平成20年現在)

- ・創業 平成6年11月1日
- ・代表取締役 畦地履正 氏
- ・資本金 1200万円
- ・株主 町民110名
- ・職員 従業員5名、パート15名
- ・年間売上額 2億5千万円
- ・主な事業内容
  - ・地域の天然素材にこだわった商品開発・販売
  - ・道の駅「四万十とおわ」の運営
  - ・自然体験事業「四万十また旅プロジェクト」
- ・その他
  - ・会員制度「RIVER」の会員は、全国各地に約300名
  - ・地元の生産者、デザイナーなどがRIVERの編集委員として参加。

四万十ドラマは、自ら生産を行うのではなく、商品の開発・販売を通じて、外部の人や組織と地元の人や組織を結びつけるコーディネート役を担い、下記のようなネットワークの中核となって事業を展開している。



四万十ドラマを中心とする人材ネットワークの概念図

## 2) 取組の目的・理念

四万十ドラマの設立目的は、「地域活性化」「人材育成」「商品開発」であったが、専従職員として採用された畦地氏は、地元に住んでいたデザイナー・梅原氏の全面協力・指導のもとで、下記の理念に基づく企画書を作成した。

これによって四万十ドラマの実施的な活動が開始され、今日まで引き継がれている。

### 四万十ドラマの経営理念と展開

#### 四万十川に負担をかけないモノづくり

- ・企画書作成者の一人である梅原氏は、「沈下橋で遊ぶ子供や川と関わりあう暮らしがあること」に魅せられ、四万十川の本質的な価値が失われてしまうとの強い危機感を持っていた。
- ・そこで、経営理念の一つとして、「四万十川に負担をかけない」という地域の持続的発展の観点を盛り込み、地域の天然素材にこだわった商品開発と販売事業を行うこととした。
- ・この理念を具現化した商品として、間伐材を利用した浴室用のひのき芳香剤「四万十のひのき風呂」、地元の茶葉だけを使ったペットボトルのお茶「しまんと緑茶・ほうじ茶・紅茶」などを開発し、全国に「四万十ブランド」の商品を展開している。

#### 人の力や知恵を最大限に吸収するためのネットワークづくり

- ・担い手が減少している中山間地において地域資源を発掘・活用していくためには、単なる1企業の動きではなく、内外の人材・智恵・資金の結集が不可欠であると考えた。
- ・四万十ドラマは、自ら生産を行うのではなく、商品の開発・販売を通じて、外部の人材・組織と地元の人材・組織を結びつけるコーディネート役を担い、ネットワークを拡大させてきた。
- ・こうした動きにより、外部から「知恵」や「販路」を獲得し、これを地域に根付く「生産」と結びつけることで、地場産品の付加価値を効果的に高めることに成功している。

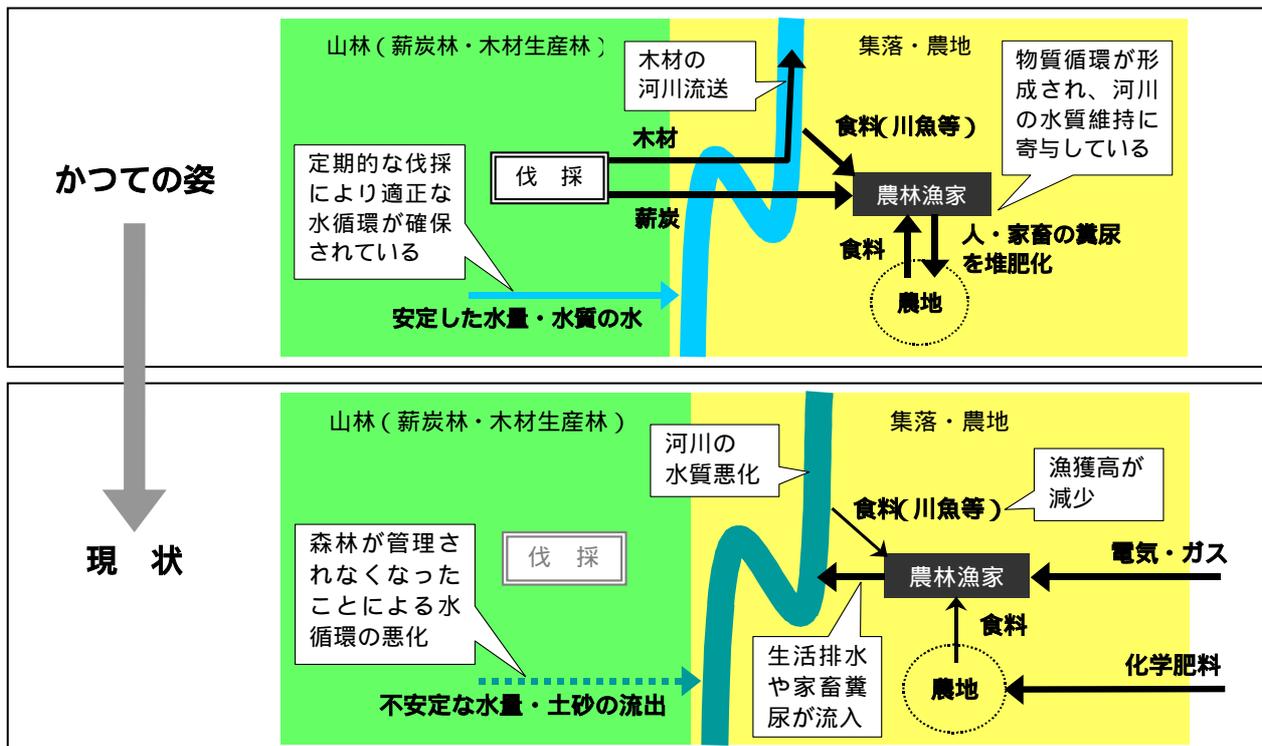


図 (参考) 四万十川中流域における里地里山の利用や物質循環の変化

### 3) 取組の経緯

- ・平成6年 旧大正町、旧十和村、旧西土佐村の出資による第三セクター企業として、「株式会社四万十ドラマ」が誕生、現社長の畦地氏が専従職員として採用される
- ・平成8年 会員制度「RIVER」の創設  
四万十川から連想される「水」をテーマとした著名人のエッセイ集の発行
- ・平成9年 第1号商品「四万十のひのき風呂」の発売  
以降、地域内外との人材連携により多数の商品開発・販売を実施
- ・平成16年 インターネット通販「四万十てんねん良心市場」の開始
- ・平成17年 純民間企業として再出発
- ・平成19年 指定管理者として道の駅「四万十とおわ」の運営を開始  
「四万十また旅プロジェクト」の開始

### 4) 取組の主な内容

#### 地域の天然素材にこだわった商品開発・販売

(株)四万十ドラマは、当初から下記のような地域の天然素材にこだわった商品開発・販売をすすめることにより、「四万十ブランド」を確立していった。

#### 第1号商品「四万十のひのき風呂」の開発と成功

- ・「天然モノの素材を活かした商品開発」の第1号として、未利用の森林資源に着目し、「四万十のひのき風呂」(ヒノキの端材にオイルを染みこませて作った浴室用芳香剤)を開発した。
- ・これが四国の企業が販促グッズとして大量に採用されて話題を呼び、企業との取引が拡大し、トータル50万枚、1億円を売上げるヒット商品となった。
- ・取組への地域の理解を得るためには、「アイデアが金を生む」という成功例を見せることも重要であり、「四万十のひのき風呂」の成功が、事業の成長に向けた大きな転換点となった。

#### 商品開発・販売とネットワークの拡充

- ・「天然モノの素材を活かした商品開発」は、その後も継続的に行われており、既存の組織や各集落の個性的産物を掘り起こした商品化に取組んでいる。
- ・ヒット商品としては、これまで静岡に出荷されていた茶葉を使ったペットボトル茶「四万十緑茶・ほうじ茶・紅茶」、古くから栽培されていた栗農家と地元の羊羹組合との連携による「栗きんとん」などの加工食品、地元の新聞紙をリサイクルした手作りバッグなどがある。
- ・これらの商品開発・販売は、地域の既存生産・販売者である「茶葉生産組合」「羊羹組合」「おかみさん市」(安心・安全な農作物の直売を行う地元農業者組織)などとの連携により実施されている。四万十ドラマからの智恵やノウハウの提供により、既存生産者・販売者による資源発掘、商品化の発想、販路の確保等が可能となった。

#### 商品開発・販売を支える「トンチ」や「デザインセンス」

- ・初期の商品企画においては、企画書作成者の一人であるデザイナー・梅原氏の果たした役割が大きい。梅原氏は、持ち前の「トンチ」と「デザインセンス」を発揮して、「天然モノ」にふさわしい商品のネーミング・パッケージデザイン等を手がけた。
- ・イターン移住者であるデザイナーの迫田氏は、梅原氏のアドバイスを受けつつ、この「トンチ」と「デザインセンス」を吸収し、現在では取組の中心人物の一人になるまで成長し、商品企画や後述する道の駅のトータルデザインを手がけている。



しまんと緑茶



四万十のひのき風呂

表 (株)四万十ドラマ取扱商品における「四万十川に負担をかけないモノづくり」の例

商品名	概要	商品開発・販売体制	四万十川に負担をかけないモノづくりの視点
四万十のひのき風呂	ヒノキの端材にオイルを染みこませて作った浴室用芳香剤	・(株)四万十ドラマが開発、販売を実施。	<b>未利用森林資源(ヒノキ)の活用</b> ・未利用の森林資源(ヒノキ)を商品化することにより、地域資源活用の可能性と森林環境保全の問題提起を発信。
四万十川新聞バック	地元の新聞(高知新聞)の古新聞を再利用した手作りバック	・農家の主婦が作った古新聞バックを(株)四万十ドラマが商品化し販売。	<b>「リサイクル」の思想</b> ・四万十川に負担を掛けない「リサイクルの思想」を発信する。 ・地元PRを図るため、高知新聞の古新聞のうち、特に四万十の記事が載ったものを中心に選んで使用している。
四万十緑茶・ほうじ茶・紅茶	地元茶葉 100%の緑茶・ほうじ茶・紅茶(ペットボトル、リーフタイプの2種)	・広井茶生産組合(しまんと茶工場)と(株)四万十ドラマが共同で商品化。 ・組合によるインターネット直売や、(株)四万十ドラマによる販売を実施。	<b>「地元産100%」へのこだわり</b> ・静岡に出荷されていた茶葉を、地元ブランドとして加工・出荷。 ・キャッチフレーズは「四万十茶葉だけ100%」であり、緑茶・ほうじ茶は、地元産茶葉の一番茶のみを、紅茶は煎茶用品種の二番茶のみを使用。
シマントウォンテッドジャーキー	有害鳥獣として駆除された鹿肉をくん製に加工	・「しまんとのもり組合(有害鳥獣駆除肉の活用組合)が商品化 ・組合によるインターネット直売や、(株)四万十ドラマによる販売を実施。	<b>有害鳥獣駆除肉の活用</b> ・「害獣を益獣」という発想から、農地や森林に損害を与えているシカの駆除肉を活用。 <b>「地元産100%」へのこだわり</b> ・調味料は全て四万十川流域産のものを使用。

### 道の駅「四万十とおわ」の運営

- ・平成19年7月より、四万十町が所有する道の駅「四万十とおわ」の指定管理者として運営に当たっている。
- ・運営理念として「自然も人も循環する滞留型の道の駅」を掲げ、地場産品にこだわった飲食サービスと商品販売、「おかみさん市」と連携した郷土料理バイキング、「四万十また旅プロジェクト」の体験プログラム(下記参照)など展開している。
- ・当初は3年目からの黒字経営を目指していたが、開設から平成20年9月までの1年2ヶ月で来場者数が20万人を超え、初年度から黒字経営を達成している。

### 四万十また旅プロジェクト

- ・体験型観光地としての「四万十川流域」の認知を図り、観光・集客の増加を目指すとともに、それに付帯して新しい地域産品(観光商品を含む)を開発し、地域に根ざした新しい産業興しを図ることを目的として、様々な体験観光プログラムを提供している。
- ・四万十川の各エリアに引き継がれている自然環境と密接に繋がった人の暮らしと風景「=四万十の日常」を素材として、地域の人々が先生役となり、「川の漁業体験(ウナギ、ツガ二等)」、「農産物収穫・販売体験(シイタケ、茶等)」、「地元素材を使ったクラフト体験(マイ箸、新聞バック等)」などのプログラムが提供されている。
- ・なお、この事業は、経済産業省の平成19年度広域・総合観光集客サービス支援事業の採択を受け、四万十川流域(上流~下流196km)の観光資源を連携させて回遊・滞在型観光ができる仕組みを構築する事を目的としており、(株)四万十ドラマが運営する道の駅「四万十とおわ」を含む15施設の連携により実施されている。

「四万十また旅プロジェクト」の参加施設

- ・道の駅「四万十とおわ」
- ・四万十屋（郷土料理店）
- ・四万十・川の駅 カヌー館
- ・四万十カヌーとキャンプの里 かわらっこ
- ・しまんとアロエ（特産品であるアロエの加工・販売事業者）
- ・大正町市場（旧大正町の市場）
- ・ネストウエストガーデン土佐（レストラン・ホテル）

上記7施設のほか、平成20年度より新たに8施設が加わり、合計15施設が参加



「四万十また旅プロジェクト」の一例（パンフレットの抜粋）

### 3. 取組による成果

#### 1) 里地里山の土地利用・管理の効用

##### 河川や森林と深く関わった生活・生業により、様々な恵みがもたらされてきた

- ・四万十川及びその支流は水質が良好であるため、ウナギ、アユ、アオノリ、テナガエビなどの多種多様な川魚が生息し、古くから山間部の貴重なタンパク源として漁業の対象とされおり、「川漁師」が現存する。また、アカザやメダカなど、環境省RL掲載種が生息している。
- ・スギ・ヒノキ林は用材として、常緑広葉樹林は薪炭林として生業・生活を支えてきた。また、成熟した広葉樹林やよく管理された人工林の土壌が水や砂などの流出抑制効果を発揮し、健全な水循環が保たれてきた。
- ・人と河川・山林が関わり合う生活・生業を通じて、地域固有の文化的景観（川を中心とした独特の土地利用や沈下橋等）や食文化（川魚の食文化等）などが継承されてきた。

##### 近年の取組により、地域の生活・環境を支えてきた一次産業の活力が向上しつつある

- ・四万十ドラマの売上額は、平成7年度の約1,000万円から順調に増加し、平成19年には役2億5千万円にまで成長している。これらが売れることにより、農林漁家たちの収入や生産意欲が向上し、地域の持続的発展に大きく寄与している。
- ・また、人口増加などの具体的な数字に表れるまでには至っていないが、四万十ドラマの活動がきっかけとなり、梅原氏から迫田氏へのデザインの継承や、地域外からの若手農業者の移住など、新たな担い手が育ってきている。
- ・さらに、農林水産物の商品開発やエコツーリズムの取組を通じて、古くから地域で培われてきた人と河川・森林とのつながり等の文化が見直されつつある。

表 四万十川中流域における里地里山の土地利用・管理の主な効用

項目	過去からの土地利用・管理で培われてきた効用	近年の取組を通じて再生・獲得された効用
1. 生物多様性保全(生物種・生息環境・土地利用)	・ 四万十川及びその支流にはアカザやメダカなど、環境省 RL 掲載種が生息している。	-
2. 資源の持続的利用・生態系サービス(水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO <sub>2</sub> )	・ 四万十川及びその支流には多種多様な川魚が生息し、古くから漁業の対象とされてきた。 ・ スギ・ヒノキ林は用材として、常緑広葉樹林は薪炭林として生業・生活を支えるとともに、樹林管理を通じて健全な水循環が保たれきた。	・ 四万十ドラマを中心とした取組によって農林業が活性化し、地域の持続的発展に寄与している。
3. 人間の福利への貢献(人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識)	-	・ 上記の取組がきっかけとなり、UターンやIターンによる新たな担い手が育ってきている。
4. 歴史・文化の継承	・ 人と河川・山林が関わり合う生活・生業を通じて、地域固有の文化的景観や食文化等が継承されてきた。	・ 農林水産物の商品開発やエコツーリズム等を通じて、古くから地域で培われてきた人と河川・森林の関わりが見直されつつある。

## 2) 外部評価

### 一次産業を軸とした地域活性化の取組が高い評価を受けている

(株)四万十ドラマの取組への表彰

- ・ 農林水産省から「立ち上がる農山漁村」に選定(平成18年度選定)。
  - ・ 高知県から「平成19年度 地場産業大賞 大賞」を受賞(受賞件名:「道の駅『四万十とおわ』の活用による地域活性化」)。
  - ・ 高知県から地産地消優良活動表彰「平成20年度 おいしい風土こうち大賞」の特別賞を受賞
- (株)四万十ドラマと連携している取組への表彰
- ・ 「おかみさん市」が、農林水産省による「平成17年度 農林水産祭・むらづくり部門」で総理大臣賞を受賞。

### 文化審議会が四万十川流域の文化的景観を「重要文化的景観」に選定するよう答申

- ・ 取組に対する評価ではないが、(株)四万十ドラマの経営理念にも盛り込まれている四万十川中流の景観は、「人の暮らしと河川が関わり合って形成された景観」として従来から高く評価されている。
- ・ 平成20年11月には、国の文化審議会が「四万十川流域の文化的景観 - 中流域の農山村と流通・往来」を国の重要文化的景観に選定するよう文部科学大臣に答申した。

## 4 . 今後の課題

---

### **経営規模の拡大と組織管理・ブランド管理**

- ・(株)四万十ドラマは、設立から着実に売上高、事業内容、取扱商品数、取引先、職員数などを拡大させている。また、当初は旧町村が出資する第三セクター企業であったが、事業が成長したことを受け、平成 17 年からは純民間企業として再出発している。
- ・今後は、「一次産業を通じた地域活性化」という設立目的や、「四万十川に負担をかけないモノづくり」という理念、さらにこれらを具現化するものとして開発・販売してきた「四万十ブランド」のクオリティーを維持しつつ、純民間企業としての「利益の創出」を両立させていくための組織管理・ブランド管理が重要と考えられる。

### **農林漁業等の「地道なモノづくり」の後継者確保**

- ・(株)四万十ドラマの商品・サービスは、何れも「地元のモノ」・「地元の人」にこだわったものであり、そのこだわりが成果の大きな要因となっているが、その一方で、取組の基盤となっている農林水産業や加工業などの「地道なモノづくり」に携わる人々の減少・高齢化が進んでいる。
- ・これまでの取組を通じて、IターンやUターン移住者が増えており、これらの人材はデザインセンスなどの新しい知恵・技術の導入に大きな役割を果たしているが、その一方で、今後、長期的に取組を持続させていくためには、他の人材・団体や行政等とも連携を図りつつ、地域に根ざした「生産」についても後継者を確保し、技術を継承していくための取組を進めることが重要と考えられる。

### **情報発信・交流のあり方の再構築**

- ・(株)四万十ドラマは、経営理念の一つである「人の力や知恵を最大限に吸収するためのネットワークづくり」を具体化した仕組みとして、会員制度「RIVER」を創設し、全国各地から会員を募集している。
- ・「RIVER」は、最盛期には 2000 名の会員数を集め、(株)四万十ドラマからの情報発信のみならず、商品モニターとしての役割など知恵やノウハウの源泉として大きな役割を果たしてきたが、現在は会員数が 300 名まで減少している。
- ・会員数の減少は、事業の成長によって多様な商品やサービスを通じたコミュニケーションが可能になったことも要因の一つと考えられ、必ずしもマイナス要素ではないが、企業の本来的な目的や理念をダイレクトに伝えることができる貴重な機会が減少していることから、今後は「RIVER」の活性化に向けた取組や、新しい情報発信・交流の手法の構築が必要と考えられる。